

地域の底力

おといねっぶ びふか
北海道中川郡音威子府村・美深町

歳月を重ねて
道北の未来を切り開く
音威子府村と美深町の試み

まちの活性化をはかる取り組みが、
開拓時代と同じように歳月をかけ、
ゆっくり地道に進められている、
北海道の北、音威子府村と、
美深町の今を探りたい。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

上／音威子府村の人口の約15%を占めるのが、北海道おといねっぶ美術工芸高等学校の生徒。写真は校内に展示された卒業生の作品。下／チョウザメの養殖に未来を託す美深町は、町の約8割を占める森林を含めた豊かな自然が観光資源になっている。



音威子府村^{おまし}茂島地区に立つ「北海道命名之地」の碑。この地で野営した松浦武四郎が、カイナー（カイはこの国に生まれたもの、ナーは敬語）というアイヌ語を記録しており、それが北海道の名に由来したといわれる。今年が北海道命名から150年目にあたる。

村の人口を支える 一二〇人の高校生たち

北海道北部の音威子府村、隣接する美深町とともに、旭川市と北端の稚内市^{わっかない}を結ぶ間の名寄盆地^{なまよ}に位置する。道内二位の長さを誇る天塩川^{てしお}の恵みを受け、一帯では開拓史以前からアイヌの人々が暮らしを営んできた。

現在、ふたつの町村は過疎化の問題を抱えながらもさまざまな取り組みを通じ、時間をかけて少しずつ未来を切り開こうとしているという。その状況をお伝えしたい。

最初に訪れたのは道内でもっと

も人口の少ない、約八〇〇人の村民を有する音威子府村。幕末にこの地を訪れた探検家の松浦武四郎^{まつらむしろう}が、村で聞いたアイヌ語をもとに一八六九年に発案した「北加伊道」が北海道の名の由来だといわれている。

北限のそば栽培を含む農業が主力産業のこの村で、未来への架け橋となっているのが、一二〇人の生徒を抱える村立北海道おといねっぶ美術工芸高等学校だ。文字どおり美術、工芸に特化。道内では定員割れの高校も少なくないなか、近年の入試では二倍近い倍率になるほど高い人気を維持している背景を、校長の松田圭右氏に伺った。

「美術科のある学校は各地に見られませんが、専科高校は珍しいと思います。人口が少ない村のなかで村立高校として成り立っているのは、作品の制作に必要な材料費をはじめ、村の支援があるから。生徒たちは、恵まれ



「就職する生徒が徐々に減る傾向にあり、進路が多様化するなか、基礎学力の向上を含めそれぞれが自己実現をはかることのできるカリキュラムを検討しています」と話す、北海道おといねっぶ美術工芸高等学校校長の松田圭右氏。

た環境の中で学んでいます」

その開校は、一九五〇年。当初は北海道名寄農業高等学校（のちに北海道名寄光凌高等学校と統合して現在は北海道名寄産業高等学校）の定時制分校としてスタートをきった。

「当時、音威子府村の人口は四〇〇〇人ほどでしたが、それが徐々に減少していき、一九七八年には約二〇〇〇人、本校の入学数は六人にまで減りました。その頃の北海道の基準では、入学生が二年連続で一〇人を割ると廃校だったんです。地元で学校がなくなってしまうと文化的なものが途切れてしまふ、という危機感から転換が図

られました」

一九八四年には、全日制工芸科に改組。二〇〇二年に北海道おといねっぶ美術工芸高等学校と改称するなか徹底した指導が行われ、やがて全国高等学校文化連盟の美術賞をはじめ多数の賞に輝く生徒たちを輩出するまでになる。教員たちの熱意ある姿勢が実り、不登校や素行に問題があった生徒が生きがいを見つかる場にもなっていた。

二〇一〇年以降は、生徒のすべてが札幌市や旭川市を含む村外からの入学に。寮が完備されており、村外からの入寮生は住民票を音威子府村に移すのが入寮の条件だ。



北海道おといねっぶ美術工芸高等学校美術コース（左）と工芸コースの授業風景。生徒たちには入学時に村から工具セットが贈られるほか、材料費や寮費なども支援されている。



現在、村民の約一五％を高校生が占めている。「生徒に村の良さを理解してもらうために森林探訪や植樹祭などの行事があったり、村民運動会に参加したりして積極的に村の人と交流を図る機会を作っています。

お年寄りが多いので運動会は生徒がメインになりますが、地元の方々は温かい目で見守ってくれています。村外からきた子たちが一人でも二人でも、音威子府村はいいなと思ってくれるのが、将来の村の活性化につながるのではないかと私たちは考えています」
 実際、過去五年間で五人が移住。そのひとり、地域おこし協力隊員として音威子府に戻ってきたのが、クリエイターの川崎映^あ氏だ。

クリエイターを魅せる 音威子府の豊かな自然

二〇一〇年におといねっぶ美術工芸高等学校を卒業した川崎氏は、幼い頃から自然画家になることを目指していたそうだ。地元札幌を離れて入学した経緯や高校時代の思い出をこう振り返る。

「中学時代は人間関係があまりうまくいかなくて、高校は環境を変えて新しくやり直したいという気持ちが強かったんです。学校見学に行った時、僕の大好きな自然が豊かだったこと、先輩たちの作品が素晴らしかったことも大き

かったですね。寮生活は一つの家族、あるいは兄弟のような、温かさがありました」

卒業後、札幌の大学を経てふたたび音威子府へ。

「村の方と呼んでいたいただいたのがきっかけですが、音威子府という土地が恋しくて、恋しくて。何も考えずに戻ってきた感じです。僕にとつての音威子府は、どこをとつても遊び場。いろいろな場所を散策し、昆虫や植物を観察するうちに、どんどん描きたいものが出てくるんですよ。村にある原生保存林（北海道大学中川研究林）からも、パワーをもらえるような気がします」



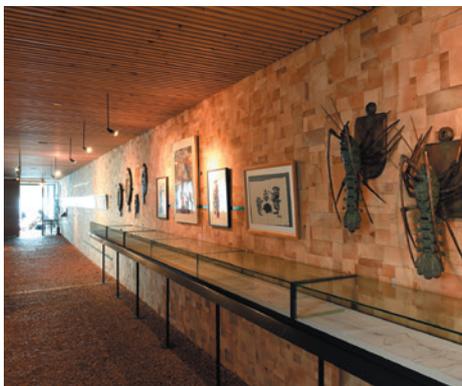
色鉛筆を画材に自然界の動植物を描くクリエイターの川崎映氏は、モチーフを観察したときの感覚を盛り込みながら作品に取り組むという。道外では大阪市の「アトリエ キブリス」で、その繊細な世界にふれることができる。



色鉛筆を使って描く川崎氏の作品は、動物や昆虫が今にも動き出しそうなリアルティーがあり、その世界に吸い込まれそうな不思議な力をたたえている。インタビューに伺ったのは、国



砂澤ビッキ記念館の内部。旭川出身の現代彫刻家砂澤ビッキ氏は、1978年に音威子府に移住。「ビッキさんがインスピレーションを得た、村の自然の魅力を発信していきたい」という川崎氏は、北海道大学中川研究林をめぐるツアーの案内役も務める。



実際にも評価の高い彫刻家、砂澤ビッキ氏が工房としていた小学校跡の「砂澤ビッキ記念館」。川崎氏は創作活動の傍ら、この記念館の学芸員として見学者を案内する

仕事をしているが、同じ卒業生のなかには音威子府に戻りたいと思いつつも、仕事や住居がネックになり前に進めない人が少なからずいるそうだ。

「そこを何とかクリアできたら、Uターンする人がもつと増えると思うんです」

小さな村という逆境をプラスに変える試み

川崎氏の願いに応えるかのように、三年間を音威子府で過ごした卒業生たちが、第二の故郷へと帰れる仕組みをつくりたいと話すのは、音威子府村長の佐近勝氏だ。

「村営住宅、公営住宅は現在、全て埋まっています。二〇一九年度からの事業で教員住宅を整備する予定ですので、空いたところを使って移住される方たちに住む場所を提供できるようになっていくと思います。おといねっぶ美術工芸高等学校で学んだ子たちは、起業して自分で物をつくり出したいという意欲が非常に強いんですね。そうした思いに応えるためにも、村として支援を考えています」

卒業生たちのアート・アンド・クラフト展や、彼らが村に滞在するアーティスト・イン・レジデンスへのサポートが既に行われており、その交流がまた新たな人を音威子府に呼びこむ好循環も生まれつつあるようだ。

また、道内で最も人口が少ない村という点に着目し、人口減少対

策における社会実験の場として、東京の大学が起業を希望する移住者を音威子府に送り込むプロジェクトも始動。人口が少ないというネガティブな状況が、プラスに働いているのが面白い。

全国七ブロックでそれぞれ、最も人口が少ない自治体が連携する「小さな村g7サミット」の活動も興味深い。音威子府村をはじめ、福島県檜枝岐村、山梨県丹波山村、和歌山県北山村、岡山県新庄村、高知県大川村、熊本県五木村の七つの自治体が、二〇一六年から交流を重ねている。

「例えばわれわれは北に、九州の五木村は南に位置している。そうした地理的な違いや季節のずれを利用して、それぞれの特産品を連携させたり、新しいサービスや商

品が生み出せないものか。g7サミットにより、新しい仕事場、雇用が生まれるかもしれないと思っています」

宗谷本線音威子府駅はかつて、ここからオホーツク海沿岸を経て稚内駅へと至る天北線の分岐点としてにぎわった。天北線は一九八九年に廃線。現在、駅内には昭和三十一年代の駅周辺の様子を再現したジオラマやかつての写真などが展示されている。

地域の活性化に向け、村役場では、若手職員が「ノチウ」（アイヌ語で星の意味）という団体を結成。駅舎でのパネル展など業務を離れ



音威子府村長の佐近勝氏は、村の中心を流れる天塩川に氷が張る冬期の活用法をはじめ、「今までは観光や村の魅力につながるとは思われていなかったものを見出し、その価値に気づく必要がある」と話す。





音威子府産のそばを目当てに観光客が訪れる、駅内の立ち食いそば店。黒みを帯びたそばは力強く風味が立ち、鉄道ファンの間では日本一旨い「駅そば」として知られるが、アクセスが容易ではないため伝説的な存在になっている。



続いては音威子府村の南、二〇一八年に開拓一二〇年を迎えた美深町へ。人口約四六〇〇人のこの町が未来を託しているのは、チョウザメの養殖だ。

美深に再び チョウザメの恵みを

「彼らの発想はわれわれには考えつかない、化学変化を起こす可能性があります」
規模が小さい自治体だからこそ、わずかな化学変化でも将来につながるうねりをつくり出す効果があるのではないだろうか。

ての活動も行われるようになってきた。「ノチウ」のメンバー、そしておといねっぶ美術工芸高等学校卒業生などの若い世代に、佐近氏は未来への思いを託す。

美深でチョウザメの養殖が始

まったのは一九八三年、旧ソビエ

ト連邦から日本の水産庁に卵が贈

られたのがきっかけだ。北海道電

力や北海道大学、水産試験場な

どとも連携しながら研究を進め、

一九九七年には養殖の様子やチョ

ウザメの生態についての展示が見

られる「チョウザメ館」が誕生した。

チョウザメが大きな利益を生む

かどうかはその卵であるキャビア

の生産にかかっているが、産卵が

可能になるのは体長が二メートル

ほどまで成長してから。生育には、

最低でも一〇年以上はかかる息の

長い話だという。

美深振興公社チョウザメ事業統

括として先頭に立つ堤尚信氏によ

れば、美深を流れる天塩川にはも

ともとチョウザメが生息してい

たとか。要はまったく新たな事業で

はなく、復活の試みなのだ。

「ほかにも道内では石狩川や

十勝川などにチョウザメがいた記

録がありますが、稚魚の標本が残っ

ているのは天塩川だけなんです」
チョウザメはサケ同様に川で産卵し稚魚は海で成長して再び川に戻る遡河回遊魚。姿を消したのに

は理由があるはずだと堤氏は話す。

「二メートル級の魚が生活する

ための十分な場所がなかったの

か、治水のために直線化された川

の形状がいけないのか。あるいは

春先、チョウザメが卵を岩に産む

時期に稲作、畑作が始まると、天

塩川に泥がふえるのが影響してい

るのか。そうした要因をしっかりと

分析し、対策を講じたうえで、将

来的には稚魚を川へ放流したいと

考えています」

チョウザメ館は堤氏を含めた四

人のスタッフが運営しているが、

現在、より大規模な養殖施設を建

設中。完成した部分から、順次施

設を稼働させており、全てが完成

するのは、四年後。事業が軌道に

乗れば、スタッフは一〇人まで増

「チョウザメ館」の展示水槽では、体長1メートルを超えるチョウザメの姿が見られる。この一帯には温泉施設やキャンプ場、テニスコートなどがあり、「びぶかアイランド」という観光拠点としてにぎわう。



美深振興公社チョウザメ事業統括の堤尚信氏は東京出身。複数のバイオベンチャー企業での勤務を経た後、2012年から現在の事業に携わる。2017年には美深町に移住。山歩きや自転車に乗るのが、休日の楽しみだという。



美深の牧場では全国的にも珍しい羊乳を商品化して販売し、人気を集めている。



仁宇布地区での撮影中、道ばたに顔を出したキタキツネ。このあたりでは珍しい光景ではなく、次ページのトロッコ王国内でも姿を見ることがあるそうだ。

チヨウザメで作る生ハムや刺し身、頭のダシで炊いたおこわなどの加工品の開発も進められている。キヤビアと比べ、チヨウザメの身は一般的になじみがないが、札幌のミシユラン星付フレンチほか、試食した高級料理店の反応は上々だったそうだ。

生息環境に左右されやすいチヨウザメの身を、いかにおいしく提供できるかが成功の鍵をにぎる。えさのやり方から魚の絞め方、その後の処理まで堤氏らが試行錯誤しながらシステムづくりが着実にすすめられてきている。さらにはコラーゲンほかチヨウザメの恵みを用いた製品の開発など、一次産業に限らず可能性は広い。

農業経営を確実に次世代に譲り渡す

そのチヨウザメの事業に町役場の職員だった時代から携わってきたのが、美深町長の山口信夫氏だ。「農業を含めてだいたい人口が減っていますから、なにかしらこれまでにない産業に結びつかないかとの思いで新しいことに挑戦し

ているんです」

山口氏いわく、その農業の領域で少しずつだが移住者が増えていくとのこと。功を奏しているのは、恩根内地域の「R&Rおんねない」をはじめ農業経営継承を仲介する仕組みだ。

「農家を始めたい希望者に二年ほど、町が財政支援をしながら研修を受けてもらい、その結果により土地や家、酪農家なら牛舎や家畜などを含めて居抜きで譲渡するんです。財産を全部渡すわけですから、皆、真剣そのものですよ。とはいえ農家、希望者ともに、町や農協が支援していることもあり、これまでに十数組の継承が成り立っています」

全国に先駆けたその活動と成果により、最近では視察に訪れる人も増えてきた。新たに農業を手がけようと思いついた人は、土地や機械にかかる資金を必要としない。一方で、跡継ぎがない農家にとっては、代々受け継いできた大切な資産を未来へと託すことができる。

「事業を譲渡する側、される側の双方がウィン・ウィンの関係。農



村上春樹氏の長編小説「羊をめぐる冒険」の舞台と思しき場所が、JR宗谷本線美深駅ほか美深町には点在。本を片手にハルキストたちが全国から訪れる。

業に限らず商工業でもそういう担い手づくり対策の条例もつくりました。やる気のある人が町に来てくれれば、「面倒を見ます」と

盆地に位置する美深町は、冬は寒く夏は暑い。かつて、非公式ながらもマイナス四・五度という日本一の寒さを記録したこともあり、積雪量も多い。その厳しい環

境が幸いし、自動車メーカーが車の試験場を開設したことにより、人の流れも生まれた。

「二〇年前から、美深の仁宇布地区で自動車の寒冷地における性能評価や雪上でのテストなどを行っています。北海道にはテストコースが数多くありますが、美深が最北。耐寒テストには条件の一番いいところ」ということで選ばれたんです」

当初は冬場のみだったが、二〇一七年には夏場も使えるオールシーズンのテストコースを新設。これまでも年間一〇〇人以上のスタッフが訪れているため、試験が通年行われることにより交流人口がさらに増えるのではないかと山口氏は期待を寄せる。



長きにわたりチヨウザメ事業に取り組んできた、美深町長の山口信夫氏。「なにごともし理屈通りにはくわけではないし、すぐに結果が出るわけでもない。10年ぐらいの長い時間をかけて考えていく必要があります」と語る。



NPO法人「トロッコ王国美深」理事長の橋本秀昭氏が立つのは、トロッコのスタート地点である旧仁宇布駅。トロッコは片道5kmの道のり。往復で40分ほどかけ、緑のなかを走る爽快な気分を満喫できる。

写真の雨霧の滝をはじめとする「仁宇布の冷水・十六滝」や松山湿原など、トロッコ王国がある仁宇布は、美深の観光資源が集まる。



赤字路線の廃線が 新たな観光資源に

テストコースは美深の街中から二〇キロほど離れた仁宇布地区にあるが、ここでは廃線となった旧国鉄美幸線を利用した「トロッコ王国」もまた交流人口の増加にひと役かっている。

美幸線は美深駅からオホーツク海に面した北見枝幸駅まで延びる計画で命名。一九六四年に美深〜仁宇布間が開業したものの日本一の赤字線とも言われ、一九八五年

には全線開通を見ることなく廃線へと至った。

その線路跡に観光用のトロッコを走らせたのが、トロッコ王国。発案から誕生まで、周囲の理解を得るため尽力してきたNPO法人

「トロッコ王国美深」理事長の橋本秀昭氏によれば、一九九八年のスタート当初は賛成の声ばかりではなかったそうだ。寄付やボランティアを募り、週末と祝日のみの営業。しかしながら次第に予想を超えるほど人気が高まるなか専任のスタッフが雇用され、施設も整備されていく。

来場者は多いときで、年間一万三〇〇〇人超。ゴールデンウィークには、予約を受けられないほどの混雑ぶりを見せる。橋本氏はその理由を、自分で運転するところ

にあると話す。

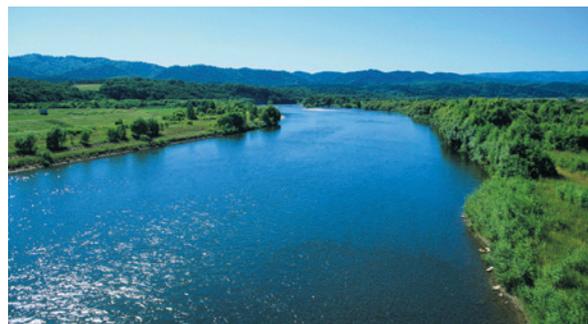
「うたい文句は、走る森林浴。風を全身に浴びながら、運転する楽しさを体感していただきたいと思ったんです」

普通免許を持つていれば誰でも運転可能。実際、乗車してみたが、白樺の森のなか、風を切って走るのには、実に爽快だった。途中、農道を横切る際やカーブではスピードを調整する必要があるなど、緩急つけるアクセントも面白く、同乗する子どもよりもむしろ運転するおとなが夢中になれそうだ。

美幸線の廃線から、約三〇年。バスに頼る今の公共交通事情しか知らない地元の子どもたちにとっては、人々が鉄道に思いをかけた歴史を知る機会にもなるだろう。

一歩一歩前進をはかる 音威子府村と美深町

トロッコ王国近くの仁宇布小中学校では、「山村留学」として一九九一年から延べ三〇〇人の子どもたちを受け入れているという、静かな動きも心にしみた。おといねっぶ美術工芸高等学校もま



音威子府村、美深町の軸となる天塩川は、「テッシン・オウベツ（魚を捕るための梁が多いという意味）」というアイヌ語に由来。ダムなどの人工建造物が少ないため、カヌーで進むことができる距離が約157kmと、日本の河川のなかではもっとも長い。（写真提供：美深町）

た、不登校などの生徒に救いの手を差し伸べていた。厳しくも豊かな自然に囲まれた道北は、都市部とは違う生活を望む子どもたちにとって、新たな扉を開く希望の地となっている。

緑に囲まれた道を行く帰り道、小さいながらもコツコツと積み重ねられている取り組みの数々を振り返り、感慨がこみあげる。音威子府で学んだ生徒たちが村に、美深のチヨウザメが天塩川に戻る流れができるまでには、まだまだ歳月を要するだろう。とはいえ、その昔、開拓民たちが森の木を一本、一本切り倒して開墾したように、ゆっくりと、着実に未来は切り開かれようとしている。